

巻 頭 言

慶應義塾大学理工学部/理化学研究所 AIP

坂内 健一

2019 年の秋に駐日欧州連合代表部で写真展「Women of Mathematics throughout Europe: A Gallery of Portraits」を開催したことをきっかけとして、当時日本数学会の理事長であった寺杣友秀先生の依頼により、2020 年 7 月 1 日より日本数学会の男女共同参画社会推進委員会の委員となりました。その後、前委員長・大山口菜都美さん（東京理科大学）の後任として 2022 年の 7 月 1 日から 2024 年の 6 月 30 日まで同委員会の委員長を務めました。そして昨年の 7 月に嶽村智子さん（奈良女子大学）に委員長を引き継いで一息がついたところです。

「男女共同参画」は「女性のための活動」と誤解されている面があるように感じています。用語は 1999 年に成立した「男女共同参画社会基本法」に基づいています。「男女」という言葉はジェンダーを二元的に捉える前世紀の用語であり、現代的には「すべての人」と理解すると良いと考えられます。「共同参画」は、すべての人に平等な権利を保障することだけにとどまらず、ひとりひとりがそれぞれが持つ能力や個性を活かして活躍できる公正な社会を共に目指していく、という理念を表しています。もちろん、性別による社会文化的なステレオタイプや教育機会・就業機会の性差は依然として深刻な問題として残っており、これを積極的に是正することは、この理念を実現するために必要不可欠です。この際にも公正な社会が目標であり、特定の性別を優遇するという意味合いはなく、また、社会の在り方に対する課題であることから、特定の何名かの個人を評価していれば十分というわけでもありません。

男女共同参画社会推進委員会の活動内容は、私自身、委員となるまであまり知りませんでした。実際は、春と秋の学会期間中に開設する保育室の設置と運営、学会期間中に開催する「女性だれでも懇談会」や「研究と子育て懇談会」など懇談会の運営、毎年秋に開催される男女共同参画学協会連絡会（連絡会）のシンポジウムへの参加とポスター発表、毎年夏に開催される女子中高生向けの「女子中高生夏の学校」（夏学）の運営補助などが、現在の主な活動となっています。特に後者の 2 つは数学会が単独で実施しているものではなく、連絡会に加盟している他の学術団体と連携して進めています。また上記の活動と同時に、定期的に委員会を開催し、男女共同参画のさまざまな面について議論する機会を設けました。数学界にとって重要な課題を扱っているにもかかわらず、委員会の活動内容や委員会を通して得られる知見が関係する一部の人に限定されてしまっている点はもったいないと感じています。2023 年秋の数学会では、教育委員会主催・男女共同参画社会推進委員会共催で教育シンポジウム「数学・数理科学の教育・研究の現状一次世代人材育成に向けて一」を開催しました。このシン

ポジウムがきっかけとなり、数理情報系の女子学部生向けのサマーキャンプが企画され、昨年の9月に開催されました。詳細はこの巻に掲載されている谷田川友里さん（東京科学大学）の記事「数理情報系女子学部生サマーキャンプ開催報告」をご覧くださいと思います。

連絡会については、男女共同参画社会基本法の成立後、日本の多くの学術団体で男女共同参画の課題に取り組む機運が生まれました。理系の学術団体が連携して積極的に上記課題を推進するために、2002年の10月に連絡会が発足しました。日本数学会は発足当初から連絡会の正式メンバーであり、第12期（2013年11月1日～2014年10月31日）には平田典子先生（日本大学）を委員長として連絡会の幹事学会を務めました。また、連絡会から発生した夏の運営には柏原賢二さん（東京大学）や大山口さんが長年関わっており、2024年度は大山口さんが実行委員長を務めました。このように数学会は、教育研究環境を改善したり次の世代を勇気づける連絡会の活動に多大に貢献して、他の学術団体に高く評価されています。数学会は再び第24期（2025年11月1日～2026年10月31日）に幹事学会を務める予定です。

連絡会の活動には、日本の研究者の状況を把握するための大規模アンケートの実施、それに基づいた政府への提言、男女共同参画にまつわる情報を共有するためのシンポジウムの実施などがあります。また、動く遺伝子とゲノム動態の研究者であった大坪久子先生が中心となって作成された「無意識のバイアス ―Unconscious Bias― を知っていますか？」リーフレットなど、公正な研究コミュニティを実現するためのさまざまな情報提供が行われています。

私が男女共同参画に関心を持つようになった理由は、母・悦子が数学者であることが大きいと思います。一度は大学院博士課程を中退したものの、子育てが一段落してから博士課程に入り直して力強く研究を進める姿を見て、好きなことを見出して没頭すると人はこうも生き生きとするものかと、子どもながらに強く感銘を受けた記憶があります。妻・博子と出会ったときも、研究者になりたいという本人の夢を全力で応援したいと思いました。しかしながら子どもの頃からこのような課題意識を持ち、また、無意識のバイアスなどの考え方も比較的早くから知っていたにもかかわらず、人の状況について感覚としてある程度理解できるようになったのは本当につい最近のことに思います。あからさまな差別であれば「これはおかしい」と憤ることができますが、無意識に内在するバイアスやそれに基づく社会文化的な機会損失などは個人の實力や選択から分離することが難しく、いとも簡単に本人に實力がないと思わせてしまいます。性差別はとても大きな問題ですが、経済格差や地域格差も同様にとっても大きな問題です。不利な立場の人の実情に目をつぶって優遇する、という姿勢ではなく、社会的・文化的・経済的要因などによって生じるあらゆる格差に想像力を働かせて、ひとりひとりが本来持ち合わせている能力を抑圧なく存分に発揮できる教育研究環境の整備と、さまざまな機会損失を補う十分な支援が、とても大切だと考えています。数学者として、また大学教員として、より良い教育研究コミュニティを形成するために具体的に何ができるか。多くの人との継続的な対話を通して考え続ける必要のある大事な課題だと考えています。